岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第 17 号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.17
155-157, March 2015

FD 活動報告

平成 26 年度岩手県立大学盛岡短期大学部 FD 活動報告

Faculty Development Activities in Iwate Junior College at 2014

岩手県立大学盛岡短期大学部教務委員会
（原英子、佐藤恭子、千葉啓子）
Academic Affairs Committee　in Iwate Junior College
Eiko HARA, Kyoko SATO, Keiko CHIBA

Keywords: *Faculty Development Activities, Personal Writing, Academic Writing*
FD 活動, パーソナル・ライティング, アカデミック・ライティング

はじめに

岩手県立大学盛岡短期大部教務委員会で平成 26 年度におこなった FD 活動について報告する。

活動は主に以下の 2 つであった。

1.　学外から講師を招き、盛岡短期大学部で講演会開催。
2.　教務委員による他大学 FD 活動の視察報告

以下に詳細を報告する。

1　学外非常勤講師による講演会開催

平成26年度のFD講演会は以下のようにおこなわれた。
日時：平成 26 年 12 月 10 日　14：40-16：10
講師：宮城教育大学教職員大学院教授　村松隆先生
講演題目「学生の資質向上に向けた大学教員のプロジェクト研究開発の取り組み」

かつて大学は自分の専門力を背景に学問を行う自覚と態度をもった自由な研究をおこなうところと思われていたが、現在は忙しくゆとりを持てないと感じている教員が少なくない。現在国立大学は、法人化の特徴を活かした改革、存在感ある大学づくりという改革プランをおこなっている。大学のミッションや学生の教育のありかたについて考えさせられることの多い内容だった。
（原英子）

2　教務委員による他大学 FD 活動の視察報告

平成 26 年度は、教務委員がそれぞれ別の大学の FD 活動の視察にいった。以下、それぞれの視察について報告する。

2-1　第 8 回東北大学「基礎ゼミ」FD・ワークショップへの参加報告

(1) 東北大学での「基礎ゼミ」FD・ワークショップ概要

開催日時：平成 26 年 11 月 1 日 13：00 - 17：00
場所：東北大学川内北キャンパス（マルチメディア教育研究棟　講義棟 C）

事前に配布されたワークショップの実施要項によると、東北大学では高校までの学習からの「学びの転換」をうながすため、全学教育として少人数科目の「基礎ゼミ」を開講しているという。この取り組みは「「学びの転換」をはぐくむ研究大学方少人数教育」として、2006 年に「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に採択されたという。今回のワークショップは、この「基礎ゼミ」を充実させるために、次年度担当教員を対象に開催されたものであった。大学での基礎教育で、高校からの学びの転換に必要なもの、という点では短期大学の教育にも通じるものがあると思い、教務委員会でも参加を検討し、筆者が参加してきた。

(2) ワークショッププログラム

ワークショップは以下のようにすすめられた。

まず、開会の挨拶（学務審議会委員長　花輪公雄氏）、そしてオリエンテーションとし「全学教育における基礎ゼミの意義と実施に向けて」（学務審議会基礎ゼミ委員会委員長　芳賀満氏）が話された。次に講演として「学生対応で留意したいこと～学生相談の現場から」（高度教養教育・学生支援機構　学生相談・特別センター教授　義武清實）があった。このあと基礎ゼミ実践事例として 3 つの報告があった。

こうした講演や報告の後、3 つのグループに分かれてグループ作業が行われた。作業終了後は、再びマルチメデ

*1　国際文化学科　*2 生活科学科生活科学専攻　　*3　生活科学科食物栄養学専攻

ィア教育研究棟にもどり、各グループで話し合われた。

(3)「基礎ゼミ」とは

東北大学の全学教育としての少人数科目「基礎ゼミ」教育のワークショップを通じて、盛岡短期大学部とは大学の規模等の違いは大きいものの、参考になる考え方が見られた。それは高等学校までの受動的な学習から、能動的学習への転換をおこなうための取り組みであり、これは、同様に高等学校から短期大学部へ入学したばかりの学生にも応用ができる視点だと思った。大学教育への導入として、いわば大学生としてのイニシエーションとして「基礎ゼミ」という科目が設けられているのである。

東北大学のように規模が大きい大学だと、「基礎ゼミ」は、少人数ゼミ、つまり教員と学生、それに学生同士でフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが可能な人数でおこなうゼミという魅力をもっているという。この点は、盛岡短期大学部のように規模が小さなところと少し事情が異なるようである。

「基礎ゼミ」には、いくつかの形態があるのだという。配布資料や報告等によると、体験学習や実験をともなうもの、野外での調査や観察をおこなうものなどが用意されているようである。ゼミをおこなう場所も研究室でおこなうもの、フィールドワークをともなうものがある。全部で 171 ものクラスが用意されており、入学した学部にこだわらず興味あるクラスを選択できるのだという。（「第 8 回東北大学基礎ゼミ FD・ワークショップ実施要綱」、当日配布資料 2「「基礎ゼミ」実施に当たっての留意事項」より）。

(4)「基礎ゼミ」実践実例報告とワークショップへの参加

「基礎ゼミ」実践実例報告の報告が 3 件おこなわれたあと、名簿によると 42 名の参加者が 3 つのグループにわかれてのワークショップをおこなった。テーマは「学生の主体性をはぐくむ授業方法」であった。

(5)　短期大学部での応用

今回の「基礎ゼミ」FD・ワークショップでは、受動的学習から能動的学習への転換をおこなう授業というテーマがあった。学生の主体性をはぐくむための授業の取り組みについての報告があり、それについてワークショップで討論をおこなった。

短期大学での教育にも同様の問題があると思う。この点、応用できる点が少なくないと思う。ただ少人数クラスの場合は、応用できるのであるが、多人数クラスの授業も多くある。そうした場合、どのように受動的学習から能動的学習となりえるのか、難しいと思った。（原英子）

2-2「思考し表現する学生を育てる VI ——コピペではなく自分の頭で考えさせるためのライティング指導——」ワークショップ参加報告

(1) セミナー概要

開催日時：平成 26 年 12 月 20 日 13：30 - 17：00
場所：京都大学
主催：関西地区 FD 連絡協議会
共催：京都大学高等教育研究開発推進センター

関西地区 FD 連絡協議会は 2008 年度より「思考し表現する学生を育てる」をテーマにシンポジウム、ワークショップを開催しており、本セミナーはその企画の最終回にあたる。今回のセミナーおよびワークショップ内容は〈学生に書くこと通じて主体形成を促すパーソナル・ライティング〉と〈バカロレア試験流の「思考の型」教えるアカデミック・ライティング〉の二本立てで行われた。本短期大学部でも授業や、編入指導等でライティング指導は必須であり役立てていただきたく、今回の参加によるセミナー概要を報告する。

(2) ワークショッププログラム

ワークショップは、ライティングの実践において成果の実績のある二人の講師を呼んで、「パーソナル・ライティング」と「アカデミック・ライティング」の二つの異なるアプローチ方法による二部構成のプログラムとなっていた。はじめに帝塚山大学全学教育開発センター谷美奈先生を迎えて「大学におけるパーソナル・ライティング導入の意義—『文章表現者としての主体形成』をいかに促すか—」を、次に京都薬科大学一般教養分野講師の坂本尚志先生を迎えて「『思考の型』をいかに学ばせるか—哲学的ライティング指導—」についての講演が、それぞれ簡単なワークと組み合わせて行われた。

(3) 谷式「パーソナル・ライティング」

「パーソナル・ライティング」の手法は、まだ日本の大学ではめずらしい実践教育だと言う。谷先生のパーソナル・ライティングとは、「内面の掘り下げ」、「とら返し」による自己を基点にした自らの内面の言語化と、言語化された体験を表現するための粘り強い「推敲」の二つの行為に重点を置いている。文章を書く際、そのテーマに合う経験はおのおのが必ず持っている。しかしその経験を他者に伝えるため言葉にしていくことは難しい。学生によっては「書くネタ」である経験を持っていることにすら気づいていないこともある。自らの内面にある感情や思い、記憶や経験の言語化を図っていくという、内発的な学びは重要であり、推敲を重ねていく事で「書く＝考える」という作業は研ぎすまされていくというの

がこの手法の仕組みである。

ワークショップでは、「言葉」をテーマに「経験を書き出す」→「そこから経験をひとつ選ぶ」→「選んだ経験に関係する事柄について、ひたすらペンを止めずに書き続けること」を実践した。非常に短時間のワークではあったがその過程において報告者は、自身の経験の裏にある気づかなかった感情を認めるに至った。次に続く「推敲」作業は時間の関係でワークショップでは行わなかったが、この「パーソナル・ライティング」手法は、自分だけの経験を自分らしい言葉で書くことが可能になることで、自ずとコピペを避けられるというのが狙いである。

(4)「思考の型」を身につける事

フランスでは、高校の最終学年の一年間、人文系で週７時間、理科系で週３時間、社会科学系で週４時間哲学教育が行われているという。坂本先生のライティング指導は、このバカロレア哲学試験で用いられるディセルタシオン（小論文）作成法をベースとしたライティングで、「哲学する」ことを教えるのではなく、哲学を題材に議論の形式、組み立てを学び、社会生活において広く役立つ「思考の型」を身につける事を目的としている。また、哲学的テクストは、複雑な論理的思考の範例であることから、自分の考えを論理的に伝えるための参考にもなる。「型」をしっかりと身につけていれば内容が何であれ対応できる、内容に集中でき誰かのコピペではなく、最終的にはパーソナルなことを述べられるようになるというわけである。

(5)　短期大学部での応用

本短期大学部の学生にとって、カリキュラムの関係上、現時点では「書く」ことを学ぶ授業は少なく、独立したライティング科目はない。したがって、まずは文章の型を学ばせることが優先されている。しかし、それだけではコピペを避けられないのが現状である。文章の型がなぜこのような構成をしているのか、その理解に至ってはおらず、思考する方法として認識できていない、身に付いていないということであろう。

学生は就職活動や編入試験準備で動機や自己アピールを書く際に自己分析としてそれまでの自分の経験を振り返るが、言葉に出来ない、あるいは経験を活用することが出来ない、ということが多い。そこにパーソナル・ライティングの手法である「自己を見つめ直し、正しい表現にたどり着くために推敲を繰り返す」という行為をあらかじめ身につけておくことが出来たならばどうだろう。自分の言葉で、文章表現する能力を磨くことは、「書く」ことのみならず、キャリア教育の求めるコミュニケーションスキルの向上にもつながると考える。

（佐藤恭子）